

海鳥研究を志して

長谷川 博

海鳥との出会い

山間の田舎で生まれ育った私は、海にすむ鳥のことをまったく知らなかった。むろん、名前を聞いても、どんな鳥なのかぜんぜんイメージがつかめなかった。

私はいわゆる大学闘争の時代に大学生を送ったから、講義・実習はなく、大部分の時間を自由に過ごすことができた。その自由な時間に大阪南港埋立地に通って、干潟の鳥、とくにシギ・チドリ類を観察し、山野の鳥とはちがったおもしろさを感じることもできた。

1973年の夏、京都府の北、若狭湾に浮かぶ冠島にはじめて渡り、オオミズナギドリの標識調査の手伝いをした。このときが、私にとって海鳥との最初の出会いだった。

オオミズナギドリには非常に新鮮な驚きを感じた。とにかく不思議だった。この鳥はコロニーがある繁殖地の島に夜にもどってくる。上空から林に突っ込んできて、地面に落ち、暗い林床を歩き、土の中に掘った巣穴にもぐりこむ。一晩中さわがしく鳴き、明け方になると島全体が大騒ぎになり、樹に登って、つぎつぎに海にむかって飛び立ってゆく。孵化は8月中旬、巣立ちは11月後半だときいた。

オオミズナギドリにとって、昼と明るく広い海、暗い夜と狭い陸地はかたく結びついているようだった。このことに陸にすむ鳥からは想像できないおもしろさを感じた。

アホウドリの保護研究

それから2年後、私は、種絶滅のおそれのあるアホウドリが本当に気になり出した。それまでは漠然とアホウドリを見たいと思っていただけで、自分自身が長期調査研究をやることになるなどとは思ってもよらなかった。

とにかく鳥島に行ってアホウドリを調査しないことには何も始まらない。そう考えて、1976年11月、最初の航海に旅立った。このときにはコロニーの沖から観察しただけだったが、翌年の3月にはついに鳥島に上陸することができた。若いときには行動力があり、行動のなかで鍛えられる。いま、ふりかえてそう思う。

幸運にも、その年の4月から、東邦大学理学部の海洋生物学研究室に助手として勤めることになった。これによってどうにか、アホウドリの長期野外研究が可能になった。時代や地域、職業、専門、興味など考えて、自分にしかできないことをしようと思うと、アホウドリの保護研究しかなかった。

それからおよそ20年が過ぎた。いろいろのことがあったが、これまで無事故で、59回も鳥島に通った。これは、ほんとうに多くの方々のお世話になったおかげにほかならない。

最初の年、鳥島のコロニーには15羽のひなしかいなかったが、この約15年間の保護活動が



成功して、ひなの数が増え、つい最近では82羽のひなが巣立った。産卵数は最初のころ推定で40個前後だったが、最近では153個になった。まちがいなく、数年のうちに100羽のひなが巣立つようになる。20年前には夢のまた夢だったことが、もうじき実現する。私にとってこんなにうれしいことはない。

アホウドリが再発見されたのは1951年1月で、今世紀後半の最初の年である。それから半世紀後は2001年で、来世紀の最初



アホウドリの親子 1995年4月

の年になる。この年までに、私はアホウドリの集団生物学的属性を解析し、この種が絶滅の危機を乗り越え、再生への道歩み始めていると、理論的に予測したいと思う。そして、アホウドリの歴史・保護・生態を集成した本をまとめたいと思っている。

海鳥研究への挑戦

1981、82年にアホウドリのコロニーにハチジョウススキの株を移植し、それが根づいて、83、84年には繁殖成功率が70%近くに引き上げられた。これで、私はアホウドリの保護に見通しがついた、と感じた（これがあさはかだったことに、あとで気づくのだが）。

この小成にいくぶん安心して、私は1984年から伊豆諸島で繁殖する海鳥類の繁殖分布と生態の調査にも本格的にのりだした。それまで夏休みに御蔵島のオオミズナギドリの繁殖生態の調査をしていたが、その調査を拡大して、できるかぎり多くの島々をまわり、海鳥各種の繁殖状況をきっちり調べておきたいと思った。

手はじめは伊豆諸島北部の島々であった。大島から神津島までの地域で、オオミズナギドリ、オーストンウミツバメ、ウミウ、ウミネコ、カンムリウミスズメの繁殖地を確認した。

中部にあたる三宅島から、八丈島、青ガ島までの地域では、オオミズナギドリ、アナドリ、オーストンウミツバメ、ヒメクロウミツバメ、ウミネコ、カンムリウミスズメの繁殖を観察した。南部のスミス島、鳥島、孀婦岩の地域には、アホウドリ、クロアシアホウドリ、カツオドリ、カンムリウミスズメが繁殖している。

1990年代になって、小笠原諸島の海鳥類にも手を広げたが、時間と資金の不足で、目下、休止している。それでも、小笠原諸島北部の聳島列島で、クロアシアホウドリ、コアホウドリ、オーストンウミツバメ、アナドリ、オナガミズナギドリ、カツオドリの繁殖を確認し、そのほかにオオミズナギドリとクロアジサシも繁殖しているらしいことがわかった。

1991、92年の春、アホウドリの繁殖状況の取材のため、私は尖閣諸島の南小島に上陸した。ここではカツオドリとアオツラカツオドリの繁殖状況をも、少し観察することができた。

日本列島はたくさん島々からなり、そこで繁殖する海鳥類の調査はまだ不十分である。時間と資金はかかるが、私は体が動くかぎり、無人島に上陸して、これらの魅力的な海鳥類を研究したいと思う。そして、できれば、日本産海鳥類の20世紀末の状況を記録し、知識を集成した『日本海鳥誌』をまとめあげ、それをこれからの世代への私の贈り物にしようと思う。

(東邦大・理・生物)

第1回、第2回 北海道鳥学セミナー報告

木下 慎

かなり前の話になりますが、1994年の11月29日、30日に第1回北海道鳥学セミナーが有珠郡大滝村大滝セミナーハウスにて、1995年3月11日、12日に第2回北海道鳥学セミナーが河東郡上士幌町糠平温泉文化ホールにて開催されました。このセミナーは北海道での鳥類研究者間の交流と各自の研究の発展を目的として、学生によって設立されました。現在北海道には鳥類を研究している多くの方がいます。広い北海道ではありますが、年に1、2回集まって互いに自分の研究を発表し、ああだ、こうだ言い合い、各自の研究について論議を深める機会をもてたら、という考えで始めました。

第1回は北海道大学の高木さん（農学部応用動物）、林さん（同左）、小高さん（地球環境科学研究科地球生態）らが中心となって催されました。1日目は帯広畜産大学（＝畜大）野生動物管理学研究室の富山さん、佐羽尾さんに「十勝地方において繁殖するタンチョウの利用環境および行動」、北海道森林総研の川路さんに「ヤブサメの繁殖生態」、北大応用動物の林さんに「ウミウの営巣場所は繁殖成功に影響するだろうか？」というテーマで話していただきました。2日目は北大染色体研究室の阿部先生に「希少鳥類のミトコンドリアDNA解析」、酪農学園大学の小西さんに「ワシミズクの生態に関する情報」、帯広畜産大学の岩見さんに「十勝地方のトビについて」というテーマで話していただきました。

第2回は畜大の私や岩見さん（野生動物管理学研究室）が中心となって催されました。1日目はひがし大雪博物館の川辺さんに「北海道の鳥類の生態的分布に関する問題」、私が「農耕地と自然草地に繁殖するノビタキの生態」、2日目は畜大野生動物の渋谷さんに「十勝地方における野鳥の衝突死に関する研究」、北大応用動物の韓さんに「韓半島（旧朝鮮半島）の鳥類相と研究史」、畜大野生動物の小藤さんに

「鳥類内分泌学（野内外分泌学）Jhon. C. Wingfieldの路線」というテーマで話していただきました。

話の内容は各自の研究内容や文献紹介等と様々。研究を始めたばかりの学生から、社会人として研究されている方や、大学の先生まで幅広く参加していただき、学生にとってはいろいろ勉強になる場となっています。1回目は強制的にお願いして講演してもらいました。2回目は発表者を公募しようということでハガキを出したのですが、残念ながら実際だれも講演希望した人はいませんでした。結局また半ば強制的にお願いするという形になってしまいました。北海道における鳥類研究の発展のためにもこのセミナーが今後もずっと続くことを願っていますが、継続していく上でいろいろ難しい面も出てくることでしょう。現在、北海道で鳥類を研究している人は40人近くいますが、今後もこの数字が維持されていくかどうか何とも言えません。しかし、これから研究を始めようという人がこのセミナーに参加し、セミナーがその人たちの良い刺激になって、今後も受け継がれていけたら、と思います。そのうえでも修士課程や博士課程の方々に積極的にセミナーに参加してもらい、また現在研究者として活躍していらっしゃる社会人や先生方にも、学生に喝を入れるためにその研究内容を発表していただきたいと思っています。

2回目のセミナーでは川辺さんの申し出により、エクスカージョンを行いました。一応「キンメフクロウ、ミュビゲラ観察会」として行いましたが、内容はスキーを使った冬の自然観察会でした。川辺さんの慣れた説明で楽しい自然観察会となりました。研究発表とともにこうした活動も通して、他の研究者の方々と交流を深めていけたらと考えています。

(帯広畜産大・野生動物管理)

九州大学理学部生物学教室生態科学研究室

江口和洋

当研究室は理学部生物学教室の11ある講座(熊本都県苓北町にある臨海実験所を含む)の一つで、全国の国立大学でも数少ない生態学プロパーの講座である。昨年退官された小野勇一教授のもとでは動物の行動生態学ないし動物社会学的研究が主体であったが、新任の矢原徹一教授のもとでは植物、動物とも様々な種を対象とした、進化生態学的研究の方向に進んでいる。大学院生まで含んだ研究室構成員の研究対象は植物、動物がほぼ半々といったところである。現在は変革の途中なので、研究室の全体的な特徴を述べることはできない。今後おいおい形作られていくことと思われる。

材料を特定の分類群に限るような方針をとっていないので研究対象は様々で、動物では哺乳類、鳥類、甲殻類、昆虫等の行動生態学的な研究が主体で、植物では有性生殖の進化、分子系統学的研究、花粉媒介昆虫との相互作用の研究などが主体である。鳥を材料としているものでは、江口がカササギの個体群研究を中心に、森林性鳥類の群集研究、マダガスカルのおオハシモズ類の社会研究などを進めている。大学院生では後期博士課程の増田智久がイワツバメの越冬習性の適応的意義の研究、前期博士課程の高木義栄がソウシチョウの繁殖生態の研究を行っている。鳥類愛好者はともかく鳥類研究者は九州では少ない。鳥類研究者のための研究機関や研究者養成のための大学院を持つ大学が九州地区には少ないことがその原因の一つである。このような現状からすると、当研究室は九州における鳥類研究の拠点とすることができる(拠点しかないと言う声もある)。

鳥類研究者を目指す学生にとっては、当研究室は数少ない生態学分野の大学院の一つである。立地条件的には必ずしも鳥類の野外研究に最適な地にあるとは言いがたいが(繁殖鳥類ニュースへの記事の投稿のお願い

種類数が少ない)、鳥類研究を目指す多くの若い人に来て欲しい。理学部生物学教室内には生態学関係の関連講座として数理生物学研究室(行動生態学、進化生態学に関する理論研究)と海洋生物学研究室(附属臨海実験所)がある。生態学の研究を進めるには恵まれた環境である。また、九州大学には旧教養部が改組になってできた大学院の比較社会文化研究科があり、その中に生態学研究室がある。ここでも、鳥類の研究をしている大学院生がいる(天野一葉:鳥類群集を指標とした都市公園の環境評価に関する研究)。以前に比べると鳥類研究を目指す学生にとっては九州大学の門戸は広まったと言える。

教育スタッフの一人として学生に対して一つだけ注文がある。生態学には6、7年毎のブームがあって、自然や動物関係のテレビ番組がこのブームの火付け役の一つである。そのために、卒業研究や大学院進学に際して、ただ動物が好きというだけで、生態学に関して何の問題意識も持たずに飛び込んでくる学生が増えている。哺乳類や鳥を研究したいという学生にその傾向が強い。研究材料に惚れることは研究の必要条件の一つではあっても、これだけでは研究を進めることはできない。野外研究では特にしっかりと問題意識がないと挫折してしまうことが多い。挫折も授業料の一つとも言えるが、かなり高くつくし、払わずに済むものは払わない方がいい。

【連絡先】

〒812-81 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学理学部生物学教室

Tel: 092-641-1101 (ex. 4419)

Fax: 092-632-2741

Internet: keguccsb@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

Nifty-serve: KHC02376@niftyserve.or.jp

学会員に有益と思われる情報なら何でも歓迎します。1600字程度以内で、一行文字数20

字のワープロ打ちでお願いします。次号の原稿締切は10月21日です。(ニュース編集)

鳥類の渡りとヒキガエルの移動

石居 進

私は10年ほど前からヒキガエルがどういう方法で繁殖池を見つけるのかという問題に興味を持っていた。ヒキガエルは毎回、同じ池で繁殖することはよく知られている。そこでまず、ヒキガエルは自分が繁殖する池はどこ(どの方向)にあるのかを知っていることを観察によって確かめた。次に、何を手がかりにその方向を決めているのかを実験的に調べた。鳥類などで知られているように、星座、太陽、地磁気など天体を使っている可能性、サケなどのように生まれた池からの化学的や物理的な信号(池の中の物質の匂い、雄の鳴き声など)を使っている可能性、通った道を地理的に記憶している(犬が匂いで道をたどるように)可能性の3つの可能性を想定し、そのどれが正しいかを定める実験を行った。その結果、第3の可能性が示され、第1、第2の可能性は否定された。そしてさらに、視覚を阻害してもヒキガエルは池にたどり着くが、嗅覚を阻害すると移動の方角がランダムになって池に行けなくなることを証明した。さらに、ヒキガエルは陸から池に向かうとき、池から陸に帰るときでは同じ道筋をたどっていることも明らかにした。これらのことから、私達は変態を終わった小さなヒキガエルは池を離れて行くときにたどった道筋を嗅覚で記憶していて、性成熟後、繁殖のため池に向かうときにはこの道筋を嗅覚で逆にたどって池にたどり着くと推定した。

さて話は変わって、2、3年ほど前の4月のことだった。山梨大学の中村司先生が退官されたので、先生のこれまでのご研究の総まとめを話していただく会を開いて下さると、立教大学の土田恵介先生からご連絡をいただいた。さっそく出席させて戴いて、カシラダカを中心とした渡りと星座の問題のお話を拝聴し、最後に質疑討論に入った。すると、樋口広芳先生が舌鋒鋭く「多くの鳥は非常に正確に渡りの先を見つけることができることは確かであるが、天体などで方向を決めていたの

では、そんなに正確に場所を見つけることはできないのではないか」というような意味の質問をなされた。

私の経験では、中村先生は何をうかがっても慎重なご返事で、あまり断定的なことはおっしゃったことがない。そこで、どうなることかと思っていたら、先生には珍しくはっきりとした態度でご返事をなさり、初めての渡りのときには天体しか使わないが2度目からは、最初のときに覚えておいた視覚や嗅覚などの第2の手段を併用して、もっと詳細に位置を決めているというご返事を、有名な実験例を挙げてなさっていた。もちろん、樋口先生も納得しておいでだった。

この議論で実は慌てたのは私だった。鳥がそうなら、ヒキガエルも最初に旅をするときには何かを頼りにその移動の方向を決めているのではないかという可能性に気がついたのである。幸いに、ヒキガエルのオタマジャクシが変態を終えて上陸する時期までには、この時から少し間があった。さっそく戦略を立てて、その年のシーズン内に一連の実験をすることが出来て、その後、これまでにおおよそその答えを出すことが出来た。その答えは極めて興味深いものだった。両生類学会ではないと言われそうなので割愛したい。

私はホルモンの研究が本職であるが、主に鳥類と両生類という二つの綱の動物について研究をしている。たいていの方は鳥とか魚とか一つのグループに決めておいてになる。私の実験の対象は少年時代の昆虫から始まって、魚類、鳥類、哺乳類と移って行き、このところ10年間以上は鳥類と両生類に落ち着いている。若い頃はすべての動物に共通な根本的な原理を見つけることが比較生物学であると思っていた。しかし変遷を続けた今は、むしろ違いを見つけそれがどのような意味を持ち、どのようにして進化してきたかを知ることが比較生物学なのだと思うようになった。種毎に、また個体によって違いがあるのが生物の特徴な

のである。人間が面白いのは個性があるからである。生物が面白いのも多様性があるからである。その意味でも鳥学会の方々が、ほとんど一人一人違った鳥の種を研究の対象にしておいでなのを最近知って、鳥学会の方々は生物学のもっとも面白いところをやっているのかと思っている。最後に、間接的に両

生類学と私の知的興味を満たすことに貢献して下さった、中村先生、樋口先生、そして上田先生にお礼を申し上げます。もう一つ、討論というのは当事者以外の人にも大切なのだということを書いておきたい。

(早稲田大学・教育・生物)

羽毛採取がもつ可能性・・・将来のDNA分析のために

西海 功

鳥類の野外研究者はこれまで、婚外受精を含む配偶システムの解明において、DNAフィンガープリント法などを利用し、分子生物学と接点を持ってきました。分子生物学の進歩に伴い、さらに、種間の遺伝的距離や個体群間の遺伝子交流や血縁度の研究も可能となってきています。野外研究者にとって、とりわけ都合の良い進歩はPCR法(DNAの特定の部分を増幅する方法)の開発と普及でした。その技術により、数枚の羽毛でもDNAの分析が可能となりました。私は、野外研究者と分子生物学者との協力が種分化理論など進化学の発展にも大きな寄与をするであろうとの期待を持っています。そこで、野外研究者にバンディングの際には羽毛を数枚採取することを勧めたいと思います。

胸部か頭部の2、3枚の羽毛をピンセットで抜き取ってDNAを抽出すると、雛の成長中の羽毛の基部について細胞からは数 μg (10^{-6}g)のDNAが、親鳥の羽毛からは数 ng (10^{-9}g)のDNAが回収できます。親子判定にこれまでよく使われてきたDNAフィンガープリント法は1回の分析に10 μg 程度必要ですので、羽からのDNAでは量が足りません。しかし、マイクロサテライトDNA多型の分析やミトコンドリアDNAのシーケンスなどPCR法を利用する手法を使えば、1 ng 程度でも1回の分析は可能です。

採取方法は、滅菌したエッペンドルフチューブ(又はサンプルピンなど)に70%のエタノールを入れておき、捕獲した鳥の羽をピンセットで抜き取り、羽の基部がどこにも接触しな

いようにして、そのまま直接エタノールの中に浸けます。水とティッシュで毎回ピンセットを拭き、他個体のDNAの混入を防ぎます。サンプルはそのまま持ち帰った後に、冷蔵庫(4 $^{\circ}\text{C}$)で保存すれば、少なくとも数カ月以上(おそらく数年～十数年以上)は保存できます。それ以上保存するにはDNA抽出を行っておく必要があります、それは実験室がなければできませんが、当面はその必要はないでしょう。

もちろん、以上の方法は、捕獲の時点でDNA分析をするつもりのない研究者に対して勧める方法であって、DNA分析に主眼をおく研究者はほとんどの場合、血液の採取を行っておくのが確実です。将来、羽毛のサンプルから得られると期待できるDNAの情報は、性、親子判定、血縁度、個体群間及び種間の遺伝的距離などがあります。羽毛の採取と保存の労力が少ないことに比して、将来の利益は計り知れないほどに大きいのではないのでしょうか。そう私が考える理由は、マイクロサテライトDNA(例えば、GTGT……GTやAAA……AAなどというように、1~4塩基対が連続してつながっているDNA)が遺伝子マーカーとして理想的と言えるほど有用であるからです。その有用性についての説明はまたの機会にゆずることにしますが、近年、多くの(日本でも複数の)鳥類研究者が様々な種でマイクロサテライトDNAの研究を始めており、数年後には多くの種でマイクロサテライトDNAの分析が容易になることが確実なのです。

(大阪市大・理・動物社会)

学術集会のお知らせ

第18回 極域生物シンポジウム

1995年12月6～7日に国立極地研究所講堂で開催されます。講演のテーマは「北極の陸上植物」、「南大洋の生態過程」です。主要テーマに直接関連しない極域の陸上生物学および海洋生物学に関する研究発表も募集しています。

お問い合わせ：〒173 板橋区加賀1-9-10 国立極地研究所 生物シンポジウム事務局
TEL：03-3962-4569, FAX：03-3962-5743, E-mail：iida@nipr.or.jp

第2回 国際モズシンポジウム

1996年3月17～22日にイスラエルのエイラトで第2回 国際モズシンポジウム (2nd International Shrike Symposium) が開催されます。アカバ湾の最奥に位置するエイラトは数百種もの鳥の渡りの通過地点となっていて、シンポジウムが開催される3月には、アフリカからヨーロッパやアジアへ渡る鳥が観察できます。講演申し込みの締め切りは12月15日です。

お問い合わせ：Yair Hendel, RT & T, 210 Herzi St., Rehovot 76270, Israel.
TEL：+972-8-467634, FAX：+972-8-470147

第9回 パンアフリカ鳥学会議

1996年12月1～8日にガーナのアクラで第9回 パンアフリカ鳥学会議 (Pan African Ornithological Congress 9) が開催されます。

お問い合わせ：Dr. Yaa Ntiamao-Baidu, Ghana Wildlife Society, PO Box 13252, Accra, Ghana.

お 知 ら せ

【基金運営委員会】

◆津戸基金からの補助

鳥学会の基金のひとつに津戸基金があり、その利子は、会員の企画されるシンポジウム(年1件)にかかる諸費用の補助金として支出いたします(鳥学会誌37巻4号参照)。

補助金額は3万円ほどですが、格式張らない実のあるシンポジウムを今年(1995年度)秋・冬季に計画されておられる方は、

- 1) シンポジウムのテーマ
- 2) 開催地(可能なら会場名も)
- 3) 責任者名
- 4) 講演者の氏名と演題
- 5) 開催日時

などを記して、急ぎお申し込み下さい。このうち1)、4)、5)は暫定的なものでもかまいません。補助金の用途も、主旨に沿ったものであれば特に限定はありません。申込期限は次の通りです。

申込期限 1995年10月10日

◆清水基金からの補助

1996年度の鳥学研究の計画に対して清水基金からの補助があります。これは「会員の鳥学に関する成果が期待できる優れた研究計画に対して交付する」ものです。

応募はこれから行う研究計画を、交付申し込み書(要領は会誌41巻1号24～27頁を参照下さい。自作したものでよい)1枚に記入するだけの簡単なものですから、要領をご覧の上奮って申請して下さい。補助金は3万円です。

申込期限 1995年10月末日

なお、上記二つの件について不明な点その他のお尋ね、ならびに申し込みは、下記の基金運営委員会委員長宛にお願いいたします。

申込先 079-01 美唄市光珠内 専修大学
北海道短期大学 正富宏之
TEL 01266-3-4321代表, 01266-3-0219直通,
FAX 01266-3-3097

〈お願い〉

鳥学会では、資金の潤沢でない若手会員の研究や、あるいは会員の研究水準の向上を少しでも手助けしようと、人々の善意により種々の基金を設けてその利息を活用することにはしています。前記の二つの案内もその一部にほかなりません。

しかし、ご存知のようにいわゆるバブル崩壊後の預貯金の低金利化により、得られる果実はこのところきわめて微々たるものとなり、現状を維持するのが難しくなっています。こうなれば、基金を元手に賭博か大穴狙いの馬券で一獲千金を夢見ないわけではありませんが (!!), そうも参りませんので、ここは手堅く元になるパイを大きくすることかと思えます。

これまでも様々な方のご好意を戴いておりますが、この機会にぜひ多くの皆様方の1灯をお寄せいただきたいと存じます。

現在、齊藤・内田・老田等の基金から学会奨学賞の副賞を、伊藤基金からIOCへの参加補助、津戸基金からシンポジウム補助、清水基金から研究計画補助へ支出するのを原則としています。用途に応じいずれかの基金へ組み込むよう指定していただいても結構ですし、指定無しでもかまいません。

もちろん、大口の寄付も大歓迎ですが、そればかりでなく小口のご寄付も、まとめて学会の基金として活用させて戴きます。紐付きでない純粹に研究のための補助金が支出できるよう、明日といわず今日にでも、額の多少に関わらず、学会基金へのお力添えを下さいますよう心からお願いいたします。

ご送金は郵便振替で学会事務局(郵便振替口座 00110-0-6599 日本鳥学会)へ「寄付」と書いてどうぞ。

(基金運営委員長 正富宏之)

【用語委員会】

鳥学用語編集委員会は、ずいぶんと長い間ご報告できるような目立った仕事は何もせず、休眠状態を重ねてきて、まことに申し訳なく思います。しかし、昨年の会誌編集委員会で出来上がった原稿だけでも会誌に掲載してもらえることが認められ、原稿の見直しも依頼してありました。今回、中村登流・正富宏之編の「行動学」の部がまとまりかけており、年内には「鳥学用語-行動学」として会誌に印刷される見込みです。とにかく、ひとつはすみがつけばあとは順調に進むと思われまので、ご期待下さい。

(用語委員長 森岡弘之)

【選挙管理委員会】

去る7月20日から8月20日にわたって行われた評議員選挙の開票を8月21日午後、大阪市立自然史博物館集客室にて行い、下記の方が次期評議員に決まりました。本来は14位までが当選ですが、当選者のうち2名が就任を辞退されましたので、15位、16位を繰り上げ当選としました。

〔次期評議員〕：樋口広芳(1位、121票)、阿部 学、上田恵介(2位、85票)、藤巻裕蔵(4位、84票)、長谷川 博(5位、81票)、中村登流(6位、70票)、唐沢孝一(7位、62票)、中村浩志(8位、61票)、福田道雄、森岡弘之(9位、55票)、江崎保男(13位、43票)、石田 健(14位、41票)、松岡 茂(15位、38票)、中村 司(16位、37票)、〔辞退者〕：藤岡正博、黒田長久(11位、54票)

なお、7月4日付けでお知らせしましたように、これより先に行われた会長選挙では、山岸 哲氏が再選されています。

(選挙管理委員長 江崎保男)

鳥学ニュース No.56

1995年9月10日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部 動物社会研究室気付

TEL. 06-605-2607 FAX. 06-605-2522 郵便振替口座 00110-0-6599

発行人 山岸 哲

印刷所 鶴丸二印刷

編集 江崎保男・西海 功